

論 文 (査読付)

## 断片とコンテクスト

沖縄戦のイメージ形成と1フィート運動

水島久光

### Fragment and Context :

Image Formation of the Battle of Okinawa and "1 Foot" Movement

MIZUSHIMA Hisamitsu

#### Abstract

Looking back on the Battle of Okinawa began with a struggle against the absence of image. Okinawa's mentality has been separated from the mainland and has been politically instrumented as the essential stone of the Pacific Ocean. For people on this island, preparing picture materials supporting their memories, it was the most important subject related to basic human rights. The "1-foot film movement association" disbanded in 2013 is a civic movement in Okinawa. As a groundbreaking presence, it has driven many peace movements. This paper aims analyzing the materials donated to the Okinawa Prefectural Archives, and from there the images. And we will consider how to pass on the war experiences through the understanding the issues of archiving.

#### 0. はじめに

本稿は、本来は2018年3月に東海大学紀要文学部第108輯に発表した研究ノート「発掘された戦時記録映像の分析—非日常と日常の境界線を読む」の後編として企図されたものである。前稿で触れた、「小型映画というメディアに映し出された事象を読むことから、アジア太平洋戦争の実相に迫る方法の検討を行う」目的については変わりなく、また、「沖縄戦記録フィルム1フィート運動の会」映像を主たる対象とすることについても予定通りである。

しかし今回は、前編で扱った「銃後組織映像」のように、多地域に遍在する資料を読み解き、つなぐ作業とは大きく異なり、既に一般に広く認知されたコレクションに絞って、「語る—聞く」「見せる—視る」行為の重層性と記憶の関係を考察し、課題を浮かびあがらせる目的を有する。したがって、その形成プロセスや外延情報、さらには沖縄戦問題が孕むデリケートな現状を十分踏まえた上で、手続きに留意し、慎重に論を進めねばならない。本稿はこうした条件から、前回（前編）とは切り離れた体裁とし、独立した題目で書き下ろすものとした。

## 1. 1 フィート運動とは何か

### 1-1 沖縄戦の記録と1フィート運動

2015年3月25日、沖縄県公文書館は「沖縄戦記録映像(1フィート運動の会収集)を公開」との報道発表を行った。この資料群(コレクション)は、1983年12月8日に発足した1フィート運動の会(正式名称:子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会)が30年に亘って米国公文書館等から購入あるいは譲渡された16mmフィルムから成る。同会の解散に伴って原盤が公文書館に寄贈されたものの、「一般利用に供するには修復およびデジタル化の必要があり、公開までに相当の時間を要することが懸念されていた」<sup>1</sup>。その後、コレクションの全体を網羅すると標榜したデジタル映像が存在することがわかり、同会と共同でテレシネを行った琉球朝日放送より、2014年12月8日、改めて提供を受けたものである。

1フィート運動は「未公開フィルムを38年間の眠りから覚して沖縄戦を知らない世代にその実像を伝えること」を目標に掲げ(「趣意書」)<sup>2</sup>、返還後の沖縄における市民運動の草分け的存在として、多くの平和運動を牽引した。しかし「運営委員の高齢化、購入フィルムの保管、活用、事務局の維持、運動経費の捻出など、県民の浄財に依存した組織の維持、運営は困難な状況に来ている」ことから、「歴史的使命は終わった」と判断、2013年3月15日をもって解散した<sup>3</sup>。1フィート運動の収集映像は、長らく「沖縄戦」の視覚的イメージを形づくる役割を担ってきた。誰もが見覚えがある「白旗の少女」「震える少女」「崖を滑り落ちる遺体」といった象徴的なシーンのソースは、この「1フィート映像」にある(図1)。

沖縄県公文書館には、この「1フィート映像」以外にも、NHK沖縄放送局が2011年に映像524本を寄贈するなどした結果<sup>4</sup>、現在「沖縄戦」に関する視覚資料が大変充実している。しかしそれはごく近年になってのことであり、講和条約発効後も米軍統治下で本土との分断が続き、また資料の乏しさから、経験の対象化が難しい期間が続いたこの地の「戦世(いくさゆ)」<sup>5</sup>、長い間「原爆」のような「国民の戦時記憶」の範列に、並ぶことすら阻まれてきたのである。

沖縄タイムス社が1950年に刊行した『鉄の暴風』が、その空白を埋める第一歩となった。1949年から現地で「琉球の声」のアナウンサーとして活躍した川平朝清によれば、52年から53年にかけてこの『鉄の暴風』の朗読番組を放送したところ、普及直後の「親子ラジオ」の聴取者に大きな反響があったという<sup>6</sup>。また前年1949年に連載が始まった石野径一郎の小説『ひ

<sup>1</sup> 沖縄県公文書館プレスリリース「沖縄戦記録映像(1フィート運動の会収集)を公開」  
[http://www.archives.pref.okinawa.jp/news/business\\_diary/4975](http://www.archives.pref.okinawa.jp/news/business_diary/4975)

以下URLは2019年1月15日現在のもの。

<sup>2</sup> 1983年12月8日の設立総会にて発表。全文は

<http://www.geocities.jp/okinawafeet/about/about.html>を参照。

<sup>3</sup> 1フィート運動の会解散宣言 <http://www.geocities.jp/okinawafeet/>

<sup>4</sup> 沖縄県公文書館プレスリリース「NHK沖縄放送局寄贈沖縄戦関係フィルム524本を公開しました」  
[http://www.archives.pref.okinawa.jp/news/business\\_diary/4979](http://www.archives.pref.okinawa.jp/news/business_diary/4979)

<sup>5</sup> 「世(ゆ)」とは沖縄語(うちなーぐち)で「時代」を表す。「ヤマト世」「アメリカ世」など。

<sup>6</sup> 吉田功・広谷鏡子「放送のオーラル・ヒストリー“ゼロ”からの出発～戦後沖縄放送史を生きる～川平朝清」(NHK放送文化研究所『放送研究と調査』2018年12号)

『めゆりの塔』は、翌年単行本化。1953年には映画化されて本土で大ヒットを飛ばした。その後これらの出版物のタイトルは、分断された現実の中で、多くの人々の「言語化されざる沖縄戦の記憶」を肩代わりする「代名詞」として用いられるようになる。



図1 左:「白旗の少女」右:「震える少女」(沖縄県公文書館資料より複写)

1960年代になるとようやく沖縄の人々は、自らの力で「記録」を重ねる活動に踏み出す。まず1963年に、琉球政府行政主席・大田政作の発案で『沖縄県史』の計画が打ち出され、次いで沖縄県史編集委員会のもと、67年から「一般住民の戦争体験の証言を記録する」活動が公式に始まる。そして71年に『県史』が刊行されると、その内容は人々に大きな衝撃を与えた<sup>7</sup>。その背景には「返還」の論議が高まる一方でくすぶる、人々の複雑な思いがあった<sup>8</sup>。そこにおける「証言記録」収集の開発は、沖縄戦に関する多くの公文書の機密扱いが解けぬ時代において、ほぼ唯一とっていい、「記憶と記録」を遡及的につなぐ方法を生み出すものとなった。

確かに「返還」はこの地の特異な歴史を語る上で、重要な節目となった。この時期、言論界は堰を切ったように多くの出版物を送り出す。その中において大江健三郎の『沖縄ノート』(1969年雑誌『世界』に連載開始、翌1970年岩波新書より発刊)のインパクトは、本土からの沖縄への眼差しを開く意味でも絶大なものがあつた。後に1フィート運動の発起人に名を連ねる大田昌秀(返還後4代目の県知事、当時は琉球大学教授)はこの大江の声に応え、二人の共同編集のもとに雑誌『沖縄経験』を創刊。1971年夏から1973年秋という僅か5号の季刊誌ではあつたが、当時の沖縄を批判的に論じる「書き手」が集う場となつた<sup>9</sup>。

しかし「返還」は簡単には、沖縄と本土が互いの経験と記憶を撚り合わせていく契機にならなかつた。例えば、NHKアーカイブスの中で「沖縄戦」のキーワードでヒットする番組は、テレビ放送が始まった1953年1月から「返還」(1972年5月15日)までの間では、わずか1

<sup>7</sup> 久部良和子「沖縄戦証言記録の公開についてーオーラル・ヒストリー活用の試みー」(『沖縄県公文書館紀要』第13号2011年)によると、毎日新聞、東京新聞など全国紙が報じている。

<sup>8</sup> 久部良は、県史編集に携わった宮城聡の日記から「審議会は、一年間の審議で戦争記録を単なる記録ではなく、県民受難の思想、感情の創作的表現をもって記録しなくては、県民悲劇の実情は後世に伝えられないという結論に達した」という言葉を引いている。(久部良:前掲論文)。

<sup>9</sup> 目取真俊によるブログ「海鳴りの島から」に5冊の目次の掲載がある。

<https://blog.goo.ne.jp/awamori777/e/9730fc4b161991b8ae1eb909d2ed4102>

件しかない（再放送除く）<sup>10</sup>。もちろん「沖縄」で検索すると、占領下のルポや外交、国会、郷土芸能などを中心に 400 を超える番組が抽出される。

「政治取引の道具」に向かう「返還」を批判するために、琉球処分以来の同化政策史と非人間性の極致ともいえる「沖縄戦」の経験との認識を共有することは、識者たちにとって不可欠に思われた。しかしそれを進めるには決定的に「イメージ」が足りなかった——「沖縄県慰霊の日」の様子も全国中継の波に乗ることはなく、「沖縄国際海洋博覧会（1975年）」絡みの「美しい沖縄」がメディアには溢れた。「返還」はむしろ反対に、本土との深刻な距離を意識化させた。「戦世」を生きた人々の「映像」への渴望は、こうした状況の中で膨らんでいったのである。

## 1-2 牽引者：大田昌秀の問題意識

果たして1フィート運動は、どのようなステップで、誰の手によってはじめられたのか。同会の二代目の事務局長を務めた中村文子の伝記に、次のような記述がある——「1970年代までは、沖縄戦を知る手がかりといえば、写真によるものばかりでした。生の映像フィルムを見ることなど考えられなかったのです」「ところが、80年代に入り、アメリカへ交換留学した人たちの調査によって、アメリカ国立公文書館に、沖縄戦を撮影した実写フィルムがたくさん保管されていることがわかりました」<sup>11</sup>。

この交換留学生とは、誰か——実は、大田昌秀こそがその一人だった。大田は戦後、軍施設で働きながら、日本とアメリカの留学試験に合格し、早稲田大学教育学部へ進学。卒業後 1954～6年にシラキュース大学大学院に留学し、その後何度も渡米調査を行っている。特に 1976～77年にワシントンの国防総省で膨大な数の沖縄戦の写真と出会い、うち千数百点を持ち帰り『これが沖縄戦だ』というタイトルで戦争の経過を追いつつながら解説をつけて地元の『琉球新報』に連載した<sup>12</sup>と記している。おそらく中村が言う「写真による」「知る手がかり」の中に、この本は確実に含まれていたはずである。

「1フィート運動の会」30周年記念誌『未来への道標』<sup>13</sup>の中で、大田は記している——「この1フィート運動は、当初私の自宅で始めたものであります」「私は戦後、アメリカ留学時代を含め延べ二十年近くもアメリカに通って沖縄戦関連の写真や資料のほか米軍の沖縄分離占領の資料を収集する機会がありました」「その過程で私は沖縄戦の写真を買集めていましたが、国立国会図書館と米国立公文書館とペンタゴンに沖縄戦の実写フィルムが無数に所蔵されているのを知り、資金が続く限りそれらのフィルムも入手しましたが、個人の力だけでは限界があり...」<sup>14</sup>——「1フィート運動の会」は、大田以外にも、発起人に仲宗根政善、池宮城秀意、豊

<sup>10</sup> NHK クロニクル番組表ヒストリー <https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/index.html> 同じ条件で「原爆」を検索すると、99番組が並ぶ。

<sup>11</sup> 真鍋和子『いのちの重さ伝えたい—沖縄戦 1フィート運動と中村文子のあゆみ』講談社、2004、p.18

<sup>12</sup> 大田昌秀『これが沖縄戦だ』那覇出版社、1977、初版まえがき

<sup>13</sup> 解散を機に発行。編集：30周年記念誌編集委員会、発行日：2013年3月15日。

<sup>14</sup> 大田昌秀「永遠に語り継げ『沖縄戦』」（『未来への道標—沖縄戦 1フィート運動の30年』

平良顕、牧港篤三、宮里悦、福地曠昭、安仁屋政昭、新崎盛暉、宮城悦二郎、石原昌家、外間政彰といった著名な大学人やジャーナリストが名を連ね、活動期間中の大田はどちらかと言えばその「中の人」として控えめに発言をしてきた。しかし解散に至る過程には、会の活動に不満をもった発足時メンバーの一部との深刻な対立があったとも言われ<sup>15</sup>、大田は、かなりそれを意識し、踏み込んだ発言をしたと思われる。

任意団体の運営方針は、普通、集った様々な人々の個性がぶつかる中で形成されていくものではある。しかし活動の核となる映像資料の収集は、一定の方針がなければ始めることはできない。当時の新聞によれば、「1 フィート運動」の結成から起動までは著しく早く、それを見れば、スタート時手元にあった大田の収集による写真やフィルム群が、指針の代わりに果たしたと考えるのが妥当だ。いやむしろ「現物サンプル」以上に、大田という存在が、実質的に会の「ポリシー」を牽引していたと考えるのが自然なのではないだろうか。

加えて、『未来への道標』に収められた「年表(1 フィート運動の会三十年の歩み)」(p.183-215)他の記述から、おそらく大田とともに、後の沖縄県公文書館初代館長、宮城悦二郎が重要な役割を果たしたであろう様子が伺える。宮城は米軍統治下の1960年から約13年間、米軍の準機関紙「星条旗」の記者を務め、米軍の内側から、英語で情報を発信し続けた<sup>16</sup>。その力量が目にとまり「返還」後の1973年、大田の誘いで琉球大学講師に転身する。彼もまた情報を運んだ「留学生」の一人であり、しかもフォト・ジャーナリストであった。その後の「沖縄戦」のイメージの形成を考えると、社会学的資料研究をベースとしていた大田に対して、視覚情報について示唆を与えたのが宮城であり、この二名の琉球大学ラインでコア・ワーキンググループが機能していたと言って間違いない。実際に結成直後の、「1 フィート運動の会」としての初出張(1984年1月)は、大田と宮城による米国立公文書館での「下見」であった(「年表」)。

この動きは、発足までに発表された大田の著作群との関係で考えると興味深い。大田の最初の単著は『沖縄の民衆意識』(1967年、弘文堂新社)である。次いで出された『醜い日本人 日本の沖縄意識』『拒絶する沖縄 日本復帰と沖縄の心』(1969年、1971年、サイマル出版会)とともに、この時期の彼は「返還」論議の中で明るみに出た「本土との意識の乖離」を、社会心理学的手法で解き起こす作業を精力的に続けていた。その過程で変化が語彙に表れる。「意識」から「こころ」へ——1972年に『沖縄のこころ—沖縄戦と私』(岩波新書)を出版した大田は、ここで「沖縄問題」を単に研究・批判の対象としてではなく、当事者としての“わたし”の経験に連なる、「心性史」としてそれを記述していく方向に転じるのだ。

大田は『写真記録 これが沖縄戦だ』(1977年)の「まえがき」で、沖縄戦戦没者の三十三回忌について触れている。それは体験者の「証言」を促す大きな契機となった。しかしそれだけに「イメージの不在」は強く意識された。続いて『総史沖縄戦 写真記録』(岩波書店,1982)

---

2013)、p.37

<sup>15</sup> 発足時事務局世話人だった自称ドキュメンタリー作家の上原正稔は、自身のブログにその旨を書き連ねネット上に拡散させている。ここでは詳細は省くが、彼の主張自体には多くの矛盾があり、その行動の源に、根拠の乏しい「思い込み」があることを読むことができる。

<sup>16</sup> 朝日新聞「惜別 宮城悦二郎さん」2004年7月14日より。

の冒頭にて呟く——「はたしてひとは、戦争の実相を誤りなく伝えうるのだろうか。私には、語り尽くすことはとてもできない。戦場での個々人の体験はごく限られたものでしかない。個々人が戦争の全容を見通すことは不可能だからである。だが、そのこと以上に、むしろ戦争そのものが、適切に表現することばもないほど、非道な所業に充ちているからではないだろうか」——ここには戦争を語る「ことば」と「イメージ」の関係についての、的確な指摘がある。

続々と『写真記録』を出版しながらも、大田は「書けば書くほど、逆に書き足りない一種のはがゆさ」（『総史沖縄戦』『あとがき』）を感じていた。そこに広島から市民のカンパによって映像を買い戻す「10 フィート運動」開始の報が届く——沖縄の「1 フィート運動」は、確かにそれを模すかたちでスタートした。しかしその背景には、「ことば」と「イメージ」、「沖縄」と「本土」、そして「戦争を知らない子どもたち」と「体験者」——こうしたいくつもの「分断をつなぐ」、使命にも似た自意識があった。

大田はそれをその媒介するものを「こころ」と表現したのだ<sup>17</sup>。だがその「こころ」の実態は何なのか、彼はその答えにたどり着けたのか——我々もその問いを追走することから、沖縄戦映像収集の扉を開いた、この活動の検証を始めることにしたい。

## 2. いつ、何を、どれだけ収集したのか

### 2-1 初期に集中的に行われた収集

ところで「1 フィート運動の会」が収集した映像群には根本的な「謎」がある。それはいったいどのような規模感をもったコレクションなのか、どのような手順で収集されたのかが見えにくいという問題である。

『未来への道標』の「1 フィート運動の収束にあたって」（報告）という巻頭言には、「寄付をもとに収集したフィルムは11万フィート」と書かれている。ホームページ上の「解散宣言」にも同じ数がある。16mmフィルムの場合、3フィートあたりの上映時間は5秒なので11万フィートだと約51時間ということになる。だが先に挙げた中村文子の伝記にも、同じ「11万フィート」の記載がある。これは「2002年現在」の数字であり、時期が明らかに合わない。

一方、琉球朝日放送から沖縄県公文書館に寄贈された映像は、DVDで34枚計31時間であり、これが、現在我々がアクセスしうるコレクションの全てである。時間数を見ただけでは、ずいぶん規模感が違う。DVDには同局が整理したリストが添付されており、紙で保管されているだけでなく、デジタルデータとして「沖縄関係資料>団体文書>琉球朝日放送株式会社文書」の階層で全文の検索が可能である。2013年の解散時にフィルム原盤とともに納品されたリストも存在するが（後述）、リスト作成作業が行われたのは1992年～1993年の間に限られている（「年表」）ので、これらから単純に全体規模の推定を行うことは難しい。

「1フィート運動の会」の映像は、2003年に「山形国際ドキュメンタリー映画祭」で上映されている。その時のカタログには同会について詳しく記載されており、「これまで運動の成果と

<sup>17</sup> 大田昌秀『沖縄のこころ—沖縄戦と私』岩波新書、1972、p.220

して集められた 16mm フィルムは、313 本、120,405 フィート、56 時間に及ぶ」とある<sup>18</sup>——これは時期、規模とも中村の伝記とほぼ一致する。この時、山形では素材映像のダイジェストとともに、収集したフィルムから制作した映画第二弾『1 フィート運動でつづる ドキュメント沖縄戦』（1995 年、57 分）も上映された。その冒頭シーンのナレーションには「76000 フィート、35 時間のフィルムを、私たちは 12 年間かけて市民のカンパなどにより取り寄せることができた」とある<sup>19</sup>。この時間数は、DVD データの時間数に近い。

すると琉球朝日放送が寄贈した映像は、1995 年までに収集した全体数の一部なのだろうか。タイトル数に注目してみよう。DVD 寄贈に関するプレスリリースには「解散するまでの 30 年間に約 200 タイトルにおよぶ記録映像を収集」とあるが、中村の伝記に書かれた「購入したタイトルは 260」——いずれも山形の記載数よりは少ない。だが、DVD34 枚のチャプター名をフィルムのタイトルと一致しているものとみなすと 306 になり、今度は山形の数に近くなる。

『未来への道標』の「年表」には、フィルムの入手記録がある。発足直後には①1984 年 5 月 1 日：12 本、②84 年 8 月 10 日：18 本、③84 年 8 月 15 日：2 本、④84 年 10 月 8 日：3 本と詳細な記録があるが、以降徐々に記載頻度が下がり、⑤85 年 12 月 5 日：15 本、⑥86 年 1 月 16 日：7 本、⑦87 年 9 月 27 日：9 本、⑧91 年 8 月 21 日：2 本、⑨91 年 9 月 9 日：「ヨーロッパ戦線（本数不明）」、⑩91 年 10 月 4 日：「中国戦線（本数不明）」、⑪95 年 2 月 20 日：6 本、⑫98 年 2 月 19 日：7 本（米国 COLORAB 社より）が最後となっている。もちろん「年表」には漏れがあることは十分に考えられるが、それにしても発足直後と比べると極端な少なさである。そもそも「収集」を目的に掲げて発足した会だったはずなのだが、不思議である。

1987 年 5 月 23 日の『沖縄タイムス』の「1 フィート運動 新目標へ」と題された社説には、これまでに購入したフィルム数として「163 本」の記載がある。上記「年表」の数とは大きな開きがあるが、仮に最終的に 300 本（タイトル）近い数を収集したのだとしても、わずか 3 年半で相当な割合を集めてしまったのだといえる。ちなみに上記社説には、「これから 1 フィート運動は第二段階に入る」と書かれている。これらのことから「収集」活動は決して 30 年間コンスタントになされていたのではなく、初期に集中していたものと言えそうだ。

## 2-2 目標は達成できたのか

そうすると、趣意書にも謳われていた「未公開フィルムを 38 年間の眠りから覚して沖縄戦を知らない世代にその実像を伝える」ことはどうなったのか気になる。この短期間である程度、活動のゴールが見えてしまったのだろうか。

2013 年 3 月の「解散宣言」には「幸い私たちの 1 フィート運動や県公文書館のフィルム収集事業、NHK の独自の収集などで、沖縄戦記録フィルムの 90% が収集され、その保存、活用態勢も整備されてきている」ことを持って「歴史的使命は終わった」として、目的達成が宣言されている。確かに現在、「沖縄戦」関連資料の整備は充実期に入っているが、会発足以前の「イ

<sup>18</sup> 『山形国際ドキュメンタリー映画祭 2003 年公式カタログ』

<https://www.yidff.jp/2003/cat095/03c101.html>

<sup>19</sup> 「年表」に「フィルム届く」との記載があったもののみをカウントした。

メージの不在」の訴えを振り返ると、1987年で先を見通すことが出来たとは考えづらい。

そもそも「1フィート運動の会」は、「アメリカに眠る未公開フィルム」の全体規模をどのように認識していたのだろうか。「趣意書」には「膨大な量」としか書かれていないが、発足準備会を報じた1983年10月25日の『琉球新報』には、既に「当面500本の購入を目標」の文字がある。その値はどこから来たものか—先に挙げた1987年5月23日の『沖縄タイムス』は、「米国公文書館には沖縄戦に関する約1千本の記録フィルムがあり」としている。この間に、本当にどうやってこの「目標値」を設定したのだろうか。

2013年段階で、沖縄県公文書館に収められた「NHK 沖縄放送局寄贈沖縄戦関係映像フィルム」と公文書館が独自に収集した「沖縄戦関連映像資料（シリーズ：米国陸軍通信隊、米国陸軍航空隊、米国海軍、米国海兵隊、米国財務省）」の本数は各々「574」「154」である。そこに「1フィート映像」を加えると、おおよそ1000近いタイトルが「取り戻せた」と言うこともできる。しかし各資料の重複の検証は十分ではなく、それで「90%」達成と言う根拠はない。

会の記録の中には、在米沖縄戦関連映像の所在をどうやって確認したかに関する記述は少ない。『未来への道標』には、1991年8月に渡米した真栄里泰山の「アメリカ国立公文書館の調査報告」が掲載されている（p.96-100）が、一応そこには「総集編の編集制作にむけて、新しいフィルムの調査収集と国立公文書館の保存状況に一応の目処をつけ、今後の資料収集の方向性をさぐる」との目的が記されている。しかしその報告によると、作業は11万リールに上る米国立公文書館内の映像資料全てを対象に「オキナワ」「リュウキュウ」で検索をかけるという原始的なもので、仮に約1000という目安が米国立公文書館側から示されていたとしても、その中から会が「収集すべき対象」の目標値を見出すことは、どう考えても容易ではない<sup>20</sup>。

この時の調査では、目的にあるように「総集編」（1995年公開の第二弾映画『1フィート運動でつづるドキュメント沖縄戦』）の制作が意識されていた。「総集編」というからには、そこには一定のゴールイメージはあったはずだが、それをうかがい知ることはできない。とはいえこの頃に、会の活動になんらかの変化があったことは確かである。その一つの起点としては1986年5月に収集したフィルムを用いた最初の映画『沖縄戦 未来への証言』が完成し、喝采を浴びたことがあろう。映像収集よりも、その上映に目的意識が移ったことは考えられる。

それは、大田昌秀と会の活動との関係にも表れている。発足の基礎は確かに大田が個人的に集めた資料と自身の研究で培われたポリシーにあった。しかし大田は1988年末には「市民平和研究所」を構想し<sup>21</sup>、問題意識の核たる「沖縄のこころ」の追求、すなわち平和的な国際連携を求める動きを本格化させる。同時に県政レベルの平和推進を掲げ、県知事選出馬のために琉球大学を辞職（1990年）、在米資料の調査はオフィシャルな機関に委ねるようになる<sup>22</sup>。市民平和研究所構想は翌年、私的機関として「大田平和総合研究所（後の沖縄国際平和研究所・2017年の大田の死去とともに閉鎖）に移行するなど、彼は「1フィート運動」のメンバー

<sup>20</sup> 調査は当時アメリカに別件の調査に赴いていた宮城悦二郎の指導のもとに行われた。

<sup>21</sup> 『琉球新報』1988.12.8より。

<sup>22</sup> 豊見山和美「沖縄県における公文書の管理と公文書館4年間の実践と今後の展望」（『沖縄県公文書館紀要』第2号、2000年）



ではあり続けたものの、会との若干の距離が、動きに見え隠れするようになっていく。

すなわち「1 フィート運動の会」は、徐々にではあるが、早い段階で、会の活動の柱である具体的な収集「目標」を見失っていたのだ。もちろん「理念」としての「子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える」ことは共有され続ける。それによって、様々な市民による平和運動に影響力をもつ結果にはなったが、肝心の資料のコレクションからは意識は離れていった。ある意味この変化は、「運動」としての「1 フィート」の限界をも示しているといえそうだ。

### 3. 浮かび上がるコンテキスト

#### 3-1 コレクションはどのように構成されていたのか

しかし今日、「運動」は終わっても、我々には資料が遺されている。その現実を踏まえるならば、1 フィート運動の研究は「運動史」を追うだけでは十分ではなく、むしろ「資料自体」からコレクション、そして運動の意味に迫る作業を中心に組み直すべきであろう。手掛かりはフィルム原盤と DVD 各々に添付されたリストである。この二つのリストと映像との照合を行うことから、藪に分け入っていくことにしたい。

リスト A (フィルム原盤リスト) は紙の状態で、ワープロ打ちの表に、分類番号、原番号 (米国国立公文書館の管理番号)、撮影月日、長さ (Ft)、時間、概要、備考が記載されている。リスト B (DVD リスト) は番号、タイトル (チャプター名)、時間、日付 (自\_至)、資料解説の各項目に、沖縄県公文書館の管理用コードが付記された表形式のデータで、多くの資料解説欄には原番号が含まれる。この「原番号」をキーにすれば二つのリストの照合は不可能ではない<sup>23</sup>。

しかし情報量の多さと検索ができないことから作業は困難を極めた。しかもリスト A から原盤を当てることは不可能で、映像を確かめることもできない。しかしリスト B の番号は「巻一チャプター」の組み合わせで振られ、映像との対応づけができるため、二つのリストの記載単位 (行) の関係がわかれば、照合を進めることができることはわかった。ところでここで重要な資料が見つかる。リスト A の表紙の次頁に「1 フィート フィルム&ビデオ対照表」という表題のついた、おそらく FAX で送られてきたと思われるメモの写しがあったのだ (図 2)、それには 1~28 までのビデオ No 毎に、「素材フィルム (通し番号)」が列挙されている。

「通し番号」はリスト A の 3 頁以降の各行欄外に手書きで振られていた。それを用いて「資料解説」(B) と「概要」(A) および「原番号」の照合を行った。その結果、公開された 34 枚の DVD のうち 28 枚目までがほぼこの対照表と一致した (3 枚目を除く: リスト A にはないチャプターが 2 つ記載)。ここから、フィルム原盤と DVD の映像の紐付けが可能になるとともに、琉球朝日放送はフィルムからダイレクトにテレシネを行ったのではなく、一旦ビデオ (形式は不明) 化を介していたことが判明。謎であった「1 フィート運動の会」がどのような手順でコレクションを積み上げてきたのか、その歴史の一部が垣間見えるようになってきた。

<sup>23</sup> リスト A は、沖縄県公文書館媒体情報 (閲覧用) 資料コード「0000119325」、リスト B の資料コードは「00001193311」である。

リストAの3頁以降の「通し番号」は全部で267行（うち2行に誤記：102＝改ページによるダブリ、214＝補足説明の行に記入）。ここから記録されたフィルムの総数は265であることがわかった。全ての行頭には「分類番号」の項目があるが、しかしそのナンバリングルールが一定していない。1～163及び165は「ローマ数字ーアラビア数字」の組で記載されており、これは会がフィルムを入手したロット単位と思われる。以降この欄の164、166～214行は空白、215～267行には「総集編ーローマ数字」「8mmfilm1, 2」「1991X...」の文字がある。

図2 フィルム&ビデオ 対照表  
(沖縄県公文書館資料より複写)

この「ローマ数字ーアラビア数字」で記載された163本（行は164だが、誤記1のため）が、まずは1987年5月23日の『沖縄タイムス』に記された「これまで購入されたフィルム数＝163本」と一致することに注目したい。

ローマ数字にはIからXまでと、K I (22本)、K II (2本)の12群があるが、この後者二つについては「備考」欄に「寄贈」の文字がある(I～Xは「購入」)。これらは、いくつかの特徴から

ブロック(群)にまとめることができる—I(12本)とII(18本)については『未来への道標』の「年表」の入手記録(①1984年5月1日：12本、②84年8月10日：18本)と一致する。しかし、③以降はリストAの分類番号とは合わない。K Iはリスト上VIIとVIIIの間に挿入されている。後半のVIIIとIXについてはロットのフィルム本数が極端に多い(24、55本：うち3本はXの後に重複記載されている)等々。

これらの特徴から「I～II」「III～VII」「K I」「VIII～X」「K II」「空白」「総集編ほか」の7ブロックごとに、入手方法やタイミングが異なっていたことを推察することができる。例えば、寄贈されたK Iの、原番号欄には数字のみの記載しかないので、I～Xとは別の収集主体によって持ち込まれたものであることがわかる。このブロックの存在は、「1フィート運動の会」発足前に大田が収集したフィルムがいつコレクションに合流したのかを考えると興味深い。分類番号体系が変化して以降についても、164、166～214の「空白」と215以降の「総集編ほか」に収められたフィルムの構成が、それ以前と明らかに異なる点に目が行く。特に「総集編」については、『未来への道標』の真栄里報告(1991年8月)との関連で見ることができるが、そもそも各ブロックおよび「総集編」内との重複が多く、「備考」欄に「購入」「寄贈」の文字もないことから、新規の収集ではなく、既存のものから編集目的で複製された可能性もある。

「1 フィート フィルム&ビデオ対照表」は、ビデオ化作業が必ずしも「通し番号」順に行

われたわけではないことを表している。最初期のⅠのフィルムは順にビデオの1～2巻に収められているが、Ⅱからは収録順が前後し始め、重複や抜け、飛びなどが目立つようになっていく。特に分類番号が「空白」のブロックでは、184～210までが落ちている。これ以外の数字の漏れについては、15のうち11の「概要」欄に「フィルム所在不明」の文字があり、やや杜撰な管理状態に置かれていたことが想像される。

いずれにしても、このリストAに記載されている範囲が、映画第二作『ドキュメント沖縄戦』以前に収集されたものと見ることができ、またリストB(DVD)上で新たに加わった29～34枚目の(ビデオが作成されたかどうかは不明)54タイトルを、それ以降(1995～)に入手した可能性のあるものと便宜的に分けておくことはできる。中村文子の伝記には、「2002年現在で、購入したタイトルは260」の記載があるが、リストから「総集編」等の明らかなダブリを除き、この54を加えるとこの数字におおよそ重なり、逆に重複を含めた総数は2003年山形のカatalogの数値(313本)に近くなる——そう考えると、実質「1フィート運動の会」の「収集活動」は、ほぼ2003年の段階で終了していたと見ることができそうだ。

『未来への道標』の「年表」には、1991年10月18日「米国立公文書館よりフィルムリスト届く」の記載がある。真栄里の渡米調査時に依頼したものと思われ、リストAの作成は、ここが起点になっていることがわかる。同じく「年表」によると1993年4月1日に「フィルムリスト完成」の文字はあるが、多少のアップデートがあっただろうことを加味した上で見ると、その作業は「総集編」の構想・準備作業と一体のものとして行われていたと考えるのが自然だ。

1990年代、在米沖縄戦フィルムの把握を目的とした調査主体が、大田知事誕生を機に県に移った(沖縄県公文書館設立構想の中に取り込まれた)ことを背景に<sup>24</sup>、「総集編」制作の一環としてビデオ化作業は行われた<sup>25</sup>。その一方で県公文書館において始まった、在米沖縄関係資料調査収集活動においては、その取り纏めを担った仲本和彦の2007年の報告によると、映像・音声資料を対象とした取組みは2003年以降に本格化している<sup>26</sup>。ここからも「1フィート運動の会」収集活動の、この時期の収束が裏づけられる。

### 3-2 原番号との照合からわかること

ところで仲本の報告書には、米国立公文書館の資料管理のコード体系(Record Group—Entry—Sub Groupの階層構造)が整理され、記載されている。これを参照すると、「1フィート映像」の7つのブロック(ロット群)のリソースをおおよそ把握することができる。

<sup>24</sup> 仲本和彦「在米沖縄関係資料調査収集活動報告Ⅱ：米国国立公文書館新館所蔵の映像・音声資料編」(『沖縄県公文書館研究紀要』第9号、2007年)。また真栄里報告書によると宮城悦二郎は、1991年1月時は「沖縄県の戦時マラリア資料調査団団長」として、「年表」によると1994年8月は「県の収集団一行」に参加している。

<sup>25</sup> 「年表」には「総集編 ビデオ『ドキュメント沖縄戦』」との記載がある。

<sup>26</sup> 「沖縄県公文書館では、2003年に国立国会図書館と共同での琉球列島米国民政府文書(USCAR文書)の収集が一段落したのを機に、文書だけでなく映像・音声資料の体系的な調査・収集にも取り組むことになった。沖縄関係の映像・音声資料をすべて洗い出そうという試みである」(仲本：前掲論文)

第1群 (I～II) 30 タイトル DVD 1～5 巻

- ・111-ADC (陸軍通信局長室記録群－通信局動画フィルム) : 23
- ・018-CS (陸軍航空隊記録群－陸軍航空隊動画フィルム 1945 年) : 7
- \*1984 年 5 月 1 日 (12 本)、及び 1984 年 8 月 10 日 (18 本) 入手

第2群 (III～VII) 18 タイトル DVD 5～9 巻

- ・127-MH (米国海兵隊記録群－海兵隊動画フィルム 1946 年) : 2
- ・428-NPC (海軍省一般記録群 1947 以降－海軍省動画フィルム 1945－1947) : 4<sup>27</sup>
- ・LAB-J (\*仲本リストに無し。上映用作品) : 3
- ・200-UN (国立公文書館受贈コレクション－ユニバーサルニュース) : 7<sup>28</sup>
- ・U.S.NAVY MN (\*仲本リストに無し。上映用作品) : 1
- ・BC USMC (\*仲本リストに無し。上映用作品) : 1

第3群 (KI) 22 タイトル DVD 5、9～10 巻

- ・(番号のみ：ソース不明だが、照合の結果、KI-1 と KI-22 の番号が IX-39、18 と一致することから 127-USMC とと思われる)

第4群 (VIII～X) 140 タイトル DVD 11～22 巻

- ・127-USMC (米国海兵隊記録群－海兵隊動画フィルム) : 65<sup>29</sup>
- ・U.S.NAVY MA (\*仲本リストに無し、上映作品) : 2
- ・428-NPC (海軍省一般記録群 1947 以降－海軍省動画フィルム 1945－1947) : 9
- ・018-CS (陸軍航空隊記録群－陸軍航空隊動画フィルム 1945 年) : 1
- ・018-MN (陸軍航空隊記録群－海軍省動画フィルム (?)) : 1
- ・107-BPR (陸軍長官室記録群－陸軍長官動画フィルム 1945 年、上映用作品) : 2
- ・111-ADC (陸軍通信局長室記録群－通信局動画フィルム) : 7
- ・111-M (陸軍通信局長室記録群－通信局動画フィルム) : 1
- ・111-SFR ((陸軍通信局長室記録群－通信局動画フィルム) : 2

第5群 (KII) 2 DVD 17 と 25

- ・111-ADC (陸軍通信局長室記録群－通信局動画フィルム) : 1
- ・MD6962 (オーシュリー氏より)

第6群 (空白) 48 DVD 23～26 巻

- ・ADN (\*\*仲本リストに無し) 1
- ・200-UN (国立公文書館受贈コレクション－ユニバーサルニュース) 44
- ・0249-USMC (\*仲本リストに無し) 3

第7群「総集編」以降 (重複が多いため省略)

こうして見ていくと、「1 フィート映像」の全体構成は、まず第1群と寄贈による第3群の陸

<sup>27</sup> 1本「428」の記載なし (NPCのみ)。

<sup>28</sup> 仲本リストには UN＝ユニバーサルニュースの記載はないが、リストAの「概要」より推定。

<sup>29</sup> 仲本リストには USMC の項目はないが、一般的略称により推定。

軍および海兵隊の記録映像を核に、第2群のニュースや上映用に編集された映像等を参照すべき補足資料として取り込んだもので基礎部分がつくられ、そこに第4群（主に海兵隊）、第6群（主にユナイテッド・ニュース）が網羅的に付加されて成り立っている（複写映像が大半を占める「総集編」は除く）。

なお第5群の二つの映像の「概要」には、1984年と85年の寄贈日が記載されていることから、第7群以前の全てのフィルムが、本格的に「総集編」（＝『ドキュメント沖繩戦』）の作業に入る90年よりも前に集められていると考えられる。

### 3-3 映画作品と素材としての「断片」

#### ① 『沖繩戦 未来への証言』（1986年）

『未来への道標』の「年表」を見ると、メンバーは結成からわずか1年2か月後の1985年の2月4日の第一回運営委員会で、フィルムの「編集」について協議をしている。最初の二つのロットが届くと、会はすぐに上映会を実施した。激しい損傷を受けた遺体映像など、生々しく衝撃的なシーンが大きな衝撃を与えたが、音声がなく順番も脈絡のないイメージの羅列に、観客からは作品化の要望が上がったのだという<sup>30</sup>。

はじめの数ロットの映像が届いたに過ぎない状況で、「作品化」を目指すのは困難なようにも思えるが、準備はほとんどん拍子で進み85年11月5日には「映画製作委員会」が設けられ、翌年5月21日には完成披露を行う。こうして出来上がった「1フィート運動の会」第一作『未来への証言』だが、実は上映時間全55分の中で、収集した映像が用いられている時間は30分に満たない。「ひめゆり学徒自決の地」から始まり、「昭和60年度県民遺骨収集」の様子など「沖繩のいま」の情景から始まり、1944年の「10.10空襲」以降の戦線の広がりや合わせ、地図などを用いた解説の参照先として写真とともに映像が数十秒単位で挿入される構成となっている。

唯一収集した映像によるシーンが続くのが、およそ26分過ぎから、35分の手前までの9分間弱である。喜屋武半島の「袋のネズミ」となってから、牛島軍司令の自決、摩文仁での星条旗掲揚までのシーン、そして屋嘉收容所の捕虜たちの表情、ハワイへの連行までのシーン、ここで音楽が変わり、助け出された子供や住民たちの姿。「地獄からの生還である」から「生きていることは実に素晴らしい」、しかし「しかし戦さは終わっても苦しみはやまない」までのナレーションの展開——ここがおそらくこの作品のクライマックスと言えよう。その後は45分過ぎに1945年7月以降の映像が織り込まれている以外、収集映像によるシーンはない。多くは写真や新たに撮影したものから構成され、米軍支配の27年間と、「返還」後も続く基地の不安、子どもたちの平和学習などの様子を次々紹介して、作品は終わる。

すなわち『未来への証言』は、「1フィート運動」の成果に基づいて「収集した映像に語らせる」手法で制作された作品ではない。むしろ「1フィート」以前に意識化された文脈に、映像を嵌めこんだものと言えよう。特に「ひめゆり」から始まり、多くの証言が挿入される前

<sup>30</sup> 『解説のいらない、子どもたちにもわかりやすい映画をぜひ…。』フィルムの感想とともに、たくさんの方が寄せられます」真鍋、前掲書、p.23

半の展開は、1950～60年代の「忘却への抵抗」から出発し「ことば」を連ねてきた歴史を振り返るような流れである。その中でも印象的なのは、沖縄各地に散在する慰霊碑を写したショットの多用である。「1フィート映像」が手に入る前は、慰霊碑が記憶をつなぐ媒介役を担ってきた——まるでそうしたメタ・メッセージを象徴するかのようである。

収集した映像のこのようなポジションは、初期に入手した（第1群中心の）映像のバリエーションの乏しさ、あるいは米軍目線で撮影されていることによる、使いにくさ——特に、激戦の中部戦線では、どうしても高射砲やナバーム、火炎放射、歩兵による侵攻シーンの単調な繰り返しになってしまうといったこともあっただろう。それ故に、その中でも、比較的自らの経験を重ね合わせ安い「住民の姿」が多く写り込んでいる部分が軸となって、『未来への証言』のコンテキストが形成されたのである。

## ② 『1フィート映像でつづる ドキュメント沖縄戦』（1995年）

『未来への証言』の完成後、会はずぐに第二作の企画に踏み出したわけではない。その時考えられていた「第二段階」とは、まずは『未来への証言』を広め、英語版の制作による海外への展開、さらなる資料収集と保全体制の構築といったことだった。したがって「総集編」の構想が具体的に意識されるに至ったのは1990年以降、知事就任を経て、草の根の市民活動と県の公式事業との二層で平和活動を推進していく必要性を、大田自身が考えるようになってからと思われる。特に、宮城悦二郎が公文書館設立に深く関わるようになったことは、意味を持つ。

繰り返しになるが、こうした流れは、大田が敗戦以降抱き続けた問題意識との関係で考える必要がある。「総集編」（『ドキュメント沖縄戦』）の構想は、様々な分断の超克を叶える「沖縄のこころ」への追求というコンテキスト上にある。「ことば」から「イメージ」へ、「写真」から「映像」へと素材を求め続けてきたのは、異なる立場の人間が眼差しを重ね得る共視の対象が必要であったからであり、大田にとっては『総史沖縄戦』の動画映像版をつくるという目標は必然だったのだ。但し、発足したての会が収集した映像ではそれは無理だった。

「総集編＝沖縄戦の全て」、すなわち3月26日の慶良間諸島への米軍上陸に始まり、9月26日の宮古守備軍降伏に至る、現地目線で捉えた戦いの実相を映像で描くためには、時々刻々の状況変化と「米軍－日本軍－住民」の複雑な関係性をカバーするだけの「素材」が必要だった。それが第4群の127-USMC（米国海兵隊記録群-海兵隊動画フィルム）の入手によって可能になった。これまでの（第3群までの）収集は「点」すなわち、体験者の記憶や証言をベースに記録を手繰り寄せる探索であった。その手法がここに至って大きく変化する。ある一定のシリーズを「面」で取り寄せ、その中にコンテキストを読むアプローチを採るようになった。その結果、ロットⅧ全24本中22本を占める「沖縄の軍政」シリーズと、ロットⅨの多くを占める「沖縄作戦（Okinawa Operation）」関連の攻防の詳細を記録した大量の映像から、文書資料や『総史沖縄戦』の写真イメージだけでは十分叙述することができなかつた、記憶の底に沈殿する「こころの闇」の正体を見出すに至ったのだ。

全57分の『ドキュメント沖縄戦』が、『未来への証言』と決定的に異なる点は、一部の参考写真と地図による状況説明ショットを除き、全てを収集した映像のみで構成していることであ

る。特に上陸作戦後から摩文仁に至る、中部戦線から那覇制圧、南部戦線に至るまでの流れは圧巻である。『未来への証言』ではおよそイメージ映像的にしか使われていなかった米兵目線で撮影された作戦の遠近を網羅した映像を用いて、十分に時間をかけて描けなかった4月1日から6月23日までの刻一刻を、非人間性を強いられる過酷な状況、米日兵と住民いずれもが混乱に陥っていた様相として描写することに成功した。それは全体の構成、及びナレーション台本の多くに、おそらく『総史沖縄戦』が参照されたことによって可能になったものである<sup>31</sup>。

しかし当然、知事に就任した大田自身が、直接その細かい作業指示を行うことはできない。エンドロールを見ると『未来への証言』では、大田は「1 フィート運動の会」のメンバーとしてだけでなく、仲宗根政善、牧港篤三とともに「監修」者として名を連ねている。しかし『ドキュメント沖縄戦』では、「監修」は牧港篤三・福地曠昭・宮城悦二郎の三名、大田は「運営委員」として記されるのみで、代替わりが印象づけられる<sup>32</sup>。その一方で、新たに「調査・考証」に山内榮、そして「プロデューサー」として仲松昌次（加えて「制作協力」にNHKエデュケーショナル）の名が加わっていることに注目したい。

総集編『ドキュメント沖縄戦』は、最初から放送との関係を意識しビデオ制作がなされたのだ。その証として、完成二ヵ月後（6月26、27日）、映画と並行して制作されたETV特集『沖縄・戦世の記録 1 フィート映像の証言』が、二夜連続で放送される。山内は、沖縄出身者ではないが、この映画及び番組との関わりから、琉球大学で非常勤講師を務めつつ会の事務局に参加し、その後もNHKの沖縄戦関連番組に「沖縄戦映像の専門家」として出演している——こうした「放送」との接点を重視した資料活用の広がり生まれたことも、「総集編」制作期の新たな局面といえるだろう<sup>33</sup>。

しかし「年表」を見ると、その後も各地の上映会には『ドキュメント沖縄戦』よりも、『未来への証言』の方が多く掛かり続ける。ほぼ全編が収集映像のみで構成され、また「検証された戦場の機微」が描かれた「総集編」は、一般のオーディエンスには重すぎ、メッセージが単純明快な前者のほうが好まれたということは容易に想像できる。「1 フィート運動の会」はその後、『沖縄戦の証言』（2005年）、『軍隊がいた島』（2009年）の二本の作品を制作する。しかしいづれにおいても証言や新撮映像を中心に据えられ、収集映像の位置は後退している。作品づくりにも「会の限界」は投影されていたのだ。

## 4. 沖縄戦映像アーカイブの将来

### 4-1 語り手なき時代の映像の行方

「1 フィート運動の会」は2013年3月15日、その「歴史的な使命」の終わりを宣言し、

<sup>31</sup> 例えば『総史沖縄戦』に記された「狙撃兵を警戒して民家に火をつける」p.94、「米兵が恐れた砲術の正確さ」p.143などのエピソードは、ナレーションにも用いられている。

<sup>32</sup> 福地曠昭は、1994年8月3日に「資料収集」目的で米国に出張している。その時に宮城は「県の収集団一行」メンバーとして同行している（「年表」）。

解散したが、その背景にメンバーの高齢化（及び相次ぐ逝去）は抗えない事実としてあった。実際、初代代表仲宗根政善は「総集編」の完成を見ずに1995年2月に死去、代表職の後を継いだ牧港篤三、映像の収集活動の中心を担った宮城悦二郎がともに2004年に亡くなっている。解散後は、長く事務局長を務めた中村文子が2013年6月、大田昌秀が2017年6月、そして解散時の代表福地曠昭が2018年7月に鬼籍に入った——いずれも「沖縄戦」という想像を絶する経験を「語り継ぐ」使命に命をかけた人々であった。しかし時間の経過は容赦なく期限を切ってくる。「語り手なき時代」は既に訪れており、「語る」行為もさることながら、そこに残された資料をどのように扱うかについても、戦後世代に委ねられるようになっていた。

沖縄県公文書館の仲本和彦は、2007年の時点で以下のように状況を語っている——「沖縄戦に関するフィルムについては、これまでに1フィート運動の会、沖縄県平和祈念資料館、沖縄県公文書館が収集しており、その数はそれぞれおよそ200巻、260巻、120巻である。合計すると約580巻になるが、重複を除くとまだ約350巻にしかならないことが分かっている。カード・インデックスによる調査で沖縄戦関係が約1,000巻存在することが確認できているので、7割近くが未収集ということになる」<sup>34</sup>。この報告書に記載された「沖縄関係映画フィルム・音声テープのシリーズ」の一覧表には、この段階で「1フィート運動の会」「沖縄県平和祈念資料館」収集映像との重複確認に従った「収集不要」の文字も記載されている。

しかしそれは具体的に、誰がどのように推進すべきか、この報告書には明確な指針は示されていない。沖縄県公文書館も独自収集に努めてきたが、それ以上に大きなインパクトを与えたのは2011年のNHK沖縄放送局による574本の映像寄贈である。これで一気にゴールが近づいた感はある。プレスリリースには「平成20年から2年をかけて米国立公文書館や東京のNHK放送センターから約600本の」資料を収集したとあり、やはり詳細な目録が添付されている。しかしそこには原番号と入手時期（経緯）の記載はなく、おそらく照合作業はかなり困難であろうことが予測される。

NHKによる沖縄戦関連番組は、「返還」以降もしばらくはあまり増えることはなかったが、現在はどうだろうか。2018年末時点で、「沖縄戦」の語で、「NHKクロニクル」のキーワード検索を行った結果は740番組に上る（再放送を含む）。しかもそのうち705番組が1995年5月以降、すなわち『ドキュメント沖縄戦』が公開されてからということを見ると、その影響は決して小さくないと思われる。もちろんNHKも継続的に米国立公文書館の調査を行ってはいったが、大規模な資料の機密解除が行われたのが戦後50年、すなわち1995年だったこと、映像を介して米国—日本「本土」と沖縄が、記録と記憶の擦り合わせを通して「つながっていく」タイミングとしてここが転機となったことの意味は、十分に考えていかねばならない<sup>35</sup>。

NHKは1995年以降、「慰霊の日（6月23日）」に近い放送日で「沖縄戦」をテーマにした

<sup>34</sup> 「また、戦後のフィルムについても1,500巻近くあり、これらは沖縄県公文書館が収集したUSCARフィルム100巻を除いてほぼ手につけられていない」（仲本：前掲論文、p.22-23）

<sup>35</sup> 桜井均は『テレビは戦争をどう描いてきたか』（岩波書店、2005）で、日本における戦争を語るトーンがモノログに囚われていたことを指摘し、それがダイアログに転換する要因の一つとして公文書の機密解除を挙げている。



番組をつくり続けたが、特に 2005 年、2015 年と 10 年インターバルで放送された「NHK スペシャル」は注目を集めた<sup>36</sup>。これに関する分析は別稿に譲りたいが、本稿との関連でいうならば、2015 年の番組（『沖縄戦全記録』）では、それ以前と比較して番組全体に占める収集映像のシェアは飛躍的に拡大した。これについては NHK 独自の集中調査の成果もちろんだが、背景に写真記録である『総史沖縄戦』及び、1 フィート映画としての『ドキュメント沖縄戦』との内容の連関があったことについても言及していくべきであろう。

いずれにしても、沖縄県公文書館を中心に、様々な映像素材、そして写真や文書資料、さらにすっかり数自体は少なくなったが、直接的に体験を語り得る人々の存在とそれらを「つなげていける＝アーカイブ環境」は、ようやく整いつつある。いよいよ待ったなしで「誰が」「どうやって」という問いに向き合っていかなければならない<sup>37</sup>。

#### 4-2 「子ども」「遺体」「俯瞰的視座」—映像の象徴性と読み

ここで最後にこだわっておきたい点がある。それは「1 フィート運動の会」の正式名称、「子どもたちにフィルムを通して沖縄戦を伝える会」が持つ意味についてである。

沖縄戦と「子ども」の関係は、1977 年に大田昌秀が最初の写真記録『これが沖縄戦だ』を出版した時の表紙に「うつろな目の少女（後に少年であったことが判明）」を用い、さらに『総史沖縄戦』に先立って 1980 年に学校図書館選定図書として『戦争と子ども』を出版したことから分かるように、当初から強く意識されてきた。「1 フィート運動の会」の発足当初の活動を伝える新聞記事においても、「子らに伝えよう」（『沖縄タイムス』1983.10.25）などの見出し文字がそれを表しており、また後に出版された中村文子の伝記も（2002 年）、小学校高学年を読者対象として設定されている。

しかし「1 フィート運動」とその映像収集活動に関する調査を続けてきて、こうした「戦争と子ども」の関係は、果たして自明のものなのかという疑問に苛まれるようになった。「1 フィート運動」というといくつもの象徴的な映像が浮かぶが、その中でも冒頭に示した「白旗の少女」「震える少女」の二人の姿は有名である。筆者の研究においても、当初はその所在を確認することから始まったことは告白しておかねばならない。確かにその映像は見つかった。しかし同時にそれは、二人以外の数多の「子どもたち」の映像、あるいは子どもに限らず多くの住民、そして住民との差を見出しにくい日本兵たちの姿ともに、目に焼き付けられる機会となった。

アーカイブを介して大量の映像と出会うとき、我々は個々のイメージが強力に放つ「意味」を一旦剥ぎ取り、「群」の中に戻して「考える」時間的猶予の体験を得ることができる。確かに「子ども」は愛おしく、その姿が戦争という異常空間の中に置かれたときに「なぜ子供たちま

<sup>36</sup> 『NHKスペシャル 沖縄 23万人の碑（いしづみ）～戦後50年目の祈り～』（1995年6月25日）、『沖縄 よみがえる戦場 ～読谷村民2500人が語る地上戦～』（2005年6月18日）『NHKスペシャル 沖縄戦 全記録』（2015年6月14日）の三本。

<sup>37</sup> 大田昌秀が収集した資料のうち、沖縄県平和祈念資料館や公文書館に収められた以外のは大田平和総合研究所（現沖縄国際平和研究所）が管理していた。「1 フィート運動の会」作成の映画作品も同様。しかし大田の死後、同研究所は閉じられた。これらの資料が今後どのような扱いになっていくのかは、2018年12月現在、全く明らかにされていない。

で死なねばならなかったのか」<sup>38</sup>という問いがストレートに出ることは否定すまい。しかしそれを「だから戦争反対」と、短絡的にあらかじめ用意された正答に指し向けてしまえば、資料の量の意味がなくなる。

「戦争と子ども」と言ったときに、被写体としてのそれが発する印象と、全く別のところからやってくる命題が交差する。それは「伝えるべき対象」としての「子ども」である。またその「べき」を謂う自意識も、「自らも子どもであった」という経験と「未来を担う者と見なす」理性から導かれるものに分かれる。しかし残念ながら「1 フィート運動」は、この三つの異なるコンテキストをショートカットしてしまった。「用意された答え」に縛られ、結論を先取りしてしまったことが、「30 年間」収集活動がコンスタントに継続できなかった理由にもつながっている。そして「運動」は、十分に目標を達成できないまま、「新たな平和運動を若い世代に委ねる」とだけ言って終息せざるを得なかったのだ。

沖縄以外の戦争の記憶が残る土地でも、同じ問題は起きている。映像に写る「子ども」と、経験を伝えるべき「子ども」は別なのである。これまでの筆者は、「戦争体験の伝承」をテーマとした研究の中で、語り手たちのモノログ性、すなわち聞き手にわかる言葉で語っていなかったことを指摘してきた。それを正す方法は「わかりやすく、かみ砕く」という次元の話だけでは済まず、聞き手のリアルに結びつけるコミュニケーションの回路が必要とされる。

それを考えるにあたって、極めて重要なヒントが、「1 フィート映像」にはある。それは「遺体映像」である。特に損傷の激しいものには思わず目を伏せてしまいたくなるが、これこそが「沖縄戦」の実相を伝えるもう一つの柱の映像群なのだ。公開された沖縄県公文書館のリストには、その所在を指示する「閲覧注意」の文字がある。しかし「子どもたち」に見せていくために、それをどのように扱っていくべきか。答えはまだ筆者にはない。

一人の人間がアーカイブの映像を全て見、解釈することは時間的に困難である。だからこそ「俯瞰的な視座」と、山岳ガイドにも似た様々な道筋の提示が必要なのだろう。それには「協働の知」的関心が駆動される必要がある。「1 フィート」の運動史と資料の突合せ作業から第一に学ぶべきは、まさにその点にあると言えよう。

さて、紙幅の限りがあり、本稿はここで止めざるを得ない。しかし大田昌秀ほかの数多くの著作を始め、映像よりも膨大に存在しているだろう写真、放送された番組、そして証言を録音した「声」、さらにはまだ外化されない人々の「記憶」などまで考慮に入れるならば、対象は無限にある。これらをどのように「新たな協働」に「つなげ」ば「道」が見えてくるのか——いずれにしても、まずは一歩ずつ、前に進んでいくしかない。

#### 参考文献（本文及び注に記載したもの以外）

大田昌秀『那覇 10.10 大空襲 日米資料で明かす全容』久米書房、1984

大田昌秀『二人の「少女」の物語 沖縄戦の子どもたち』新星出版、2011

大田昌秀『人生の蕾のまま戦場に散った学徒兵 沖縄 鉄血勤皇隊』高文研、2017

<sup>38</sup> 『沖縄タイムス』1984.5.17 より。

- 阿波根昌鴻『米軍と農民—沖縄県伊江島—』岩波新書、1973
- 田仲康博『風景の裂け目 沖縄、占領の今』せりか書房、2010
- 吉見俊哉（編）『万博と沖縄返還—1970年前後（ひとびとの精神史5）』岩波書店、2015
- 仲本和彦『研究者のためのアメリカ国立公文書館徹底ガイド』凱風社、2008
- 水島久光「70年の時差—伊勢原市・戦争体験インタビューとワークショップ」『東海大学紀要文学部』  
第107輯、2017
- 水島久光・西兼志・桜井均「NHK アーカイブスの構成に関する研究（前・後編）」『放送研究と調査』  
2011年4月号、6月号
- 水島久光・原田健一編『手と足と眼と耳—地域と映像アーカイブをめぐる実践と研究』学文社、2018

※本研究は科研費（基盤研究（C）課題番号 16K00467）「戦後70年の記憶と映像アーカイブの社会循環的機能に関する研究」の助成をうけたものである。

※本研究は、沖縄県公文書館、那覇市立図書館から複写した多くの資料に基づいている。未だ分析・検証は十分でなく、「1 フィート運動の会」解散時事務局長であった石川元平氏ほか存命の方々について未取材のため、今後、正すべき誤りも多々あるだろうことを最後に付記しておく。